

昭和42年12月20日

日本大学三島高等学校同窓会会報

創刊号

母校のおもいで

一期生 庄 司 秀 夫

母校の今昔

日本大学三島高等学校は昭和十三年四月三百日に開校式を行なったのですから今から算えて十年に近い歳月が流れただけです。創立當時と現在との母校の姿を比較してみると、大きな発展をしているのに誰もが驚くことと思います。この発展の陰には母校の先生方の対応を忘れるまでの学園づくりへの努力、また校友その他の大学関係の方々の強力な支援があったからだと思います。開校した当時は三〇四名が入学を許可され学校教育の経験豊かな角田陽六先生を校長に七名の専任の先生と大学から同じく七名の講師の先生方が指導に当たるという構成でした。母校の第一歩が踏み出されたわけです。何もない白紙の状態から、ヤンバグが与えられてこれにどの程度は苦労したことと思ひ出します。最初の理想が実現されることはな

行く河の流れは絶えずしてしかももとの水にあらず……あり、ふりきることは、その次友を思い、過去を顧みる時、好きなこの方丈記の冒頭の言葉が思い出され、よく口遊みます。卒業以来、早、八ヶ月、しかしその思い出は遠い昔のことのように思われてしかたありません。今改めてこうして筆を執り、高校時代を思い出すことは必ずしも良き想い出ばかりではありませんでしたが、懐い想い出はかりではあります。高校時代を思い出すことは必ずしも良き想い出ばかりではありませんが、懐い想い出となつて残ってきます。

高校時代、自分の思うことは、その度合い、自分の存在が認められゆく大学の中で、自分の存在価値意識が薄れ、享楽的な遊びに耽り、ある者は学生運動

時、自分に割り切れない何かがあるもとの水にあらず……あり、ふりきることは、その次友を思い、過去を顧みる時、好きなこの方丈記の冒頭の言葉が思い出され、よく口遊みます。卒業以来、早、八ヶ月、しかしその思い出は遠い昔のことのように思われてしかたありません。今改めてこうして筆を執り、高校時代を思い出すことは必ずしも良き想い出ばかりではありませんでしたが、懐い想い出はかりではあります。高校時代を思い出すことは必ずしも良き想い出ばかりではありませんが、懐い想い出となつて残ってきます。

高校時代、自分の思うことは、その度合い、自分の存在が認められゆく大学の中で、自分の存在価値意識が薄れ、享楽的な遊びに耽り、ある者は学生運動

随感

第七期生 庄 司 一 洋

お知らせ

謹啓益々ご多幸の御事とお慶び申し上

記

祝賀贈呈記念品

一百

金額

五百

五百